
キミと僕とハル～ 3と2のひかく～

のりまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミと僕とハルく3と2のひかく

【Nコード】

N1844J

【作者名】

のりまき

【あらすじ】

病に冒された幼馴染。檻の中に縛りこんでしまった幼馴染。ただ流されていくだけの幼馴染。三人の幼馴染が、それぞれ、3と2を比較していくお話、のはずでした。

サイレンと共に白塗りのワゴン車がハルを連れて行った。華吾^{かご}はそれをジツと見ることにしかできなくて、隣ではカナが泣き崩れている。

先生がみんなを教室に戻したのは、車が見えなくなってからだつた。華吾の記憶に新しい小学生の時の光景。

華吾とハルとカナは奇しくも同じ日に生まれ、そして出会った。住む家も違えば苗字も違うが、いつも一緒にいたため三つ子のようだと思われてきていた。何があっても決して離れない。迷子になつてしまったときも、川に入りびしょびしょに濡れきってしまったときも、三人は一人として欠けることはなかった。

“幼馴染”という言葉を知ったとき、カナは華吾とハルに微笑んだ。同様に華吾も微笑んだが、ハルだけは苦笑していた。

今更だけど、ハルの表情の意味がわかったような気がした。思い返ししながら、華吾はその足をハルの居る病院へと向けた。

隣り合った三軒の行き来は十数秒とかわらない。ベランダから声を掛ければ、いかにも女の子らしいカナの部屋を通して、大きな本棚のあるハルの部屋まで通じた。

見上げたコンクリートの塊が憎くて仕方ない。今はもう、カナの部屋の先にあるハルの部屋を見渡せない。

たとえ気休めだとしても 静かに光の駒を進めていくエレベ―

ターの中で華吾は考えた。インフルエンザの予防とか、定休日のお知らせとかのポスターが彼を囲んでいる。

ハルの居る部屋がもっと地上に近かったらどんなに良かったことだろう。

部屋の入り口には『織田治樹様』と名が振られていた。そういえば、ハルの本名は『治樹』はるきだった、と今更ながら確認する。白塗りの取っ手に手を掛けると、中から談笑が聞こえた。それを聞くだけで、華吾は意地悪そうに笑みを浮かべる。

華吾が部屋の戸を開けると、ハルより先にカナが振り返った。

「おい、カナ。掃除くらいやってけよ」

目が合うなりそう言う華吾に、ごめん、とカナは片目を閉じて合掌させる。

「カナ、おでこー！」

「え〜」

ベッドの上で上半身だけを起こしているハルに呼ばれて、カナは嫌そうに頬を膨らませながらもおでこをさらけ出した。乾いた音が小さく響く。

痛そうにおでこをさするカナの隣に、華吾は笑いながら座った。

あれからすでに四年が経っていたが、三人の関係は変わらない。入退院を繰り返していたハルも二人と同じ高校へ通えるようになった。誰に頼んだわけでもないけれど、ハルが病気を抱えても三人一

緒の学校に行き、クラスも同じだという廻り合わせに、華吾もカナも神様という存在に気づかずにはいられなかった。

一日中、全くと言っていいほど悲しげな表情を見せないカナがどう思っているのかわからないが、華吾は時々、ハルの部屋に来るのが心苦しく感じてしまう。華吾もカナも、ハルの病がどのくらい重いのかわっていた。残された時間の少なさも予想できている。だからこそ、三人の間に神様が居るのだと思う。

三人の談笑は毎日、日が沈むまで続いた。夕方のチャイムが鳴ると、カナが先に部屋を後にするようになったのはここ最近のことだった。カナの家の事情を知っている二人は、家事の手伝いだと想像していた。

カナに恋人は居ない。

華吾とハルがそれを知らないはずが無かった。カナが二人と離れたくないこともわかっていた。

カナが帰ってからは男の時間だ。笑って口にしたのはハルだった。ゲームをするにも、カナが頬を膨らませるから、我慢するしかなかった。

「前に言ってたこと考えてたんだけどさ、やっぱり、わからなかったよ」

紫がかった空が窓の奥から覗けた。それに重なるように映されるハルの姿を見ながら、華吾は口を開いた。

携帯ゲーム機のボタンを押しながら、ハルは素っ気無く返事をし

た。

「カナに好きな人ができて、それは仕方の無いことだし、どうしようもないよ。そりゃ、こうして三人一緒に居られる時間が少なくなるのは嫌だけど、それでも、どうしようもない」

「華吾らしいな」

ゲームの電源を切ると、ハルは窓に映る華吾と視線を合わせた。

「俺は、やっぱりそれ自体がありえないと思う」

「カナが誰かを好きになること？」

「ああ。俺か華吾が居る限り、それはありえないし、たとえば、俺が居なくなってもカナは誰かを好きになったりはしない。俺と華吾の立場が逆だったとしても、それはかわらない、と思う」

ハルは賢かった。毎日学校に通っている華吾やカナよりも、賢かった。

ハルが振り返り微笑みかけてくれると、この話題も底を尽きる。静寂に包まれそうになる室内に明かりを灯すように、ハルは手元にあるゲームを再開させた。

校則違反ではあるが、華吾もこのときのために持ってきていたゲーム機を靴から取り出す。カナの頬が膨れないこの時間を、少年たちは楽しんでいた。

隣り合う三軒は今も変わらず仲良く並んでいる。屋根の色を除けば、まったく同じ。何一つ劣ることも勝ることも無く、綺麗に並んでいた。

しかし、そこから出てくる人物は昔とは違っていた。二人目の子供までは出てくるのに、三人目が出てこない。二人の子供は、三人目の住む家を一瞥し、そのまま通り過ぎていく。

「数学一時間目だよ？ 宿題どうするの？」

歩き始めて数分と経たないうちに、カナは華吾の前に立ちほだかっただ。睨んでくるその瞳から目を背け、華吾は彼女の横を通り抜けた。

「だから、見せてってお願いしてるじゃん」

「昨日、ハルと一緒にずっとゲームしてたでしょ」

追いかけてくるカナの表情が少しずつ綻んでいく。

「華吾、おでこ出してよ？」

再び立ちほだかるカナに、華吾はたじろいだ。

「だ、だって、昨日はハルのお母さんが来るの遅くって」

「それでも、やろうと思えばできたよね？ 気持ちの問題。罰は罰だよ。さ、おでこ出しなさい、華吾くん？」

カナの指がはじかれ、華吾のおでこに乾いた音が鳴り響く。

罪に対して、必ず何かしらの罰があるべきである。三人の間で定めた罰は“デコピン”だった。どんなに些細なことでも、“デコピン”は用いられた。

決して強力ではない。つんと痛くなるだけだが、それだけでも十分だった。

「華吾、早くしないと宿題する時間なくなっちゃうよ？ 一問でも多く解いておいたほうがいいんじゃないの？」

先に行くカナが振り返って目を細めた。おでこをさすりながらも、華吾は短いスカートから伸びるカナの足に視線を奪われてしまう。また一つ、カナは女性へと近づいてしまった。

「華吾は気づくのが遅いよ。俺なんて、中学の時には意識し始めたぜ」

差し込む陽光が二人の影を入り口まで伸ばす。もうそろそろチャイムがなる頃だ。しかし、カナはハルのところへ来なかった。

「僕だって、意識は中学の時にしてたさ。でも、今日は……なんていうか、ドキツとした」

語尾を濁らせる華吾に、ハルはニヤリと口角を上げる。

ハルがカナを幼馴染としてではなく、一人の女の子として意識し始めたのは中学校に入学するときだった。確かに、それまでに何度もカナは女の子らしい服装をしていたが、それはやはりどこことなく子供っぽくて、幼馴染という存在を打ち消すほどの“何か”が足りなかった。

しかし、中学校の入学式当日。制服を着た彼女は今までの親しみを掻き消すように、どこか遠くて、どこか刺激的で、どこか尊かつ

た。

ぎこちない動きは、緊張だと思わせていたけれど、本当は違った。しかし、それが自分だけでなく、華吾も同じだと気づくとホッとしていた。

カナが、幼馴染であって、幼馴染でなくなった瞬間だった。

「なんだか今日は口数が少ないと思ってたんだけど、そのせいだったのか」

違うとは言えなかった。

夕方のチャイムが鳴ると、途端に掛け布団が剥ぎ取られた。ハルの細い足があらわになると同時に、華吾が起き上がるハルの傍による。

「汗をかかないと、トイレが近いんだよな」

なんて笑いながら、点滴と共にハルは部屋から出て行った。

青白く細いハルの足を、華吾は毎日のように見ている。どうして立てるのが不思議なほど、細い足。

走ることすらできないその足が、昔は誰よりも速く走れたのが本当に不思議だった。

ハルの居ない間、華吾はシーツのしわを伸ばしたり、冊数の少ない本棚を整理したりしていた。思い描いてもしょうがない、病に侵されていないもう一人のハルを思い描いた。

発病の前、ハルは運動神経もよく、頭も良かった。自分なんかと比べれば顔もいい。ハルがモテるのは当然だったし、事実モテていた。恋愛に疎い華吾だったけれど、ハルが女子に告白を受けているところを何度も目撃していた。というよりも、目撃させられていた。

悪趣味があるわけではない。それだけは、華吾にもわかったけれど、それをさせるハルの真意はわからなかった。

きっと、ハルが健在であるならば、今も度々告白を受けるだろうし、そして、それを自分に目撃させるのだと、華吾は思っていた。

ぐしゃりと折り返された掛け布団を綺麗にし、華吾はゲーム機の電源を入れた。

間もなく、ハルは点滴と共に部屋に戻ってきた。

「なんか、幼馴染が執事つてのも案外悪くないな」

ゲーム機を取り出しながら、ハルは笑って言った。

九月も中旬を過ぎると、チャイムが鳴ってからの日の沈みが早い。そのせいか、時間までも早く流れていくように感じてしまい、まだ少ししかゲームを進めていないにもかかわらず、空はすっかり闇に包まれてしまった。

「時々、羨ましくなるんだよな、華吾とカナが」

華吾が鞆にゲーム機をしまっていると、ハルは電源も切らずにゲーム機を持ったまま指を休ませて口を開いた。

「“3”という数字は頂点が並んでるんだけどさ、“2”という数字は一つだけ離れていくんだ。“2”は“3”の中の頂点の一つが離れてできた数字なんだよ」

「何言ってるんだよ、ハル？ 意味わからないって」

ジッパーを閉め眉根を寄せる華吾に、ハルは微笑みもせず続けた。

「もうそろそろ、カナを檻から出してあげてもいいんじゃないか？自由にしてあげてもいいんじゃないか？ きつと、俺たちは知らずのうちにカナを縛っていたんだ。だから、そろそろ離してあげよう」

華吾自身も、それは感じ取っていた。カナはいつも二人のそばに居て、二人から離れずに遊んでいた。いつも一緒に居るのが当たり前。しかし、いつしかそれがカナを縛り付けていた。友達も部活も勉強も、それこそ恋愛までも、カナは二人に遠慮しているように思えた。やりたいこともあったかもしれない。一緒に居るのが当たり前だったために、カナは我慢してきたのだろう。

力なく返事をし、華吾はハルにさよならを告げた。

ハルの病は静かにハルの体内を巡ろうとしていた。時々、なぜ入院をしているのかがわからなくなるほどなにも無いときもあれば、急に締め付けられるような痛みが走ったりするときもある。それでも、良くもならなければ、悪くもならない。唯一、今までと違つと

ころがあるとするば、その入院生活の長さだった。

高校に進学して間もなく、ハルは再び入院することになってしまった。一学期は無理だとしても、二学期からは普通に通えるはずだった。今までなら長くとも二、三ヶ月で退院できたから。しかし、今回の入院はそろそろ半年ほど経とうかというところまで来ている。

華吾やカナが居なくとも、ハルはそれを気にする素振りを見せなかったし、実際、彼はそれほど気にしていなかった。

しばらく経った日曜日。カナは病院の近くにある小さな公園に華吾を連れてきた。雨が少し小降りになってきた昼下がりのことだった。

さすがに休みともなると、幼馴染は制服を着ていない。しかし、その表情は休日には似合わない風だった。

「お母さんから聞いたよ。華吾、ドナーの検査受けたんだってね」
寂しい瞳の奥に怒りが見える。華吾は頷くことしかできなかった。それでも、カナの目は華吾を責め立ててくる。

何も聞かされていないし、これといって治療をしているようにも見えないことが、かえって華吾を焦らせていた。いつかは必要になるのではないかという気持ちもあった。それと同時に、興味本位にも似た感覚も湧き出てきた。一向に治る気配を見せないハルの病を思うと、やはり残された時間が短いのだと感じてしまった。

「フルマツチ、なんだってね」

雨が強まり、カナの目が次第に濡れていく。

カナはいつだってそうだ。華吾かハルのどちらかが欠けるのを嫌った。二人が喧嘩をしまつても、自分を挟んでまでも二人を一緒に居させようとした。ハルの発症のとき、いつまでも三人一緒にはいられないことを知ったつもりではあったが、いざ、そのときが訪れようとするとなえられない。

だから、カナはいつだってそうだ。二人のためなら献身的になれた。

「大事なことを隠してたんだから、おでこ出してよね？」

華吾の額に乾いた音がしたかと思うと、今度はカナがおでこをさらけ出した。

「私も同じ。大事なことを隠してるから、ね？」

「なんだよ、隠し事って？」

戸惑う華吾にカナは答えなかった。

ずいずいと迫るカナに、躊躇しながらも華吾はカナの額にデコピンを打ち付ける。

「うっ。やっぱり痛いよ、これ」

「だから戒めになるんだろ？ でも、やっぱり今のはわけがわからないよ」

「後は、親の説得だけだからね」

背を向け、その場を去っていくカナに、華吾は首をかしげること

しかなかった。

どうして、雨なんか降っているのだろうか　その日、カナの家の灯りが遅くまで点いていたことを、華吾は覚えていた。

カナを檻から出してあげてもいいんじゃないか？

ハルの声が一日中華吾の耳から離れなかったのは、カナがフルマツチだったということをお母さんから聞かされてしばらく経った日のことだった。華吾は毎晩のように、ハルのために親に相談を持ち掛けたが、考えておく、とだけ言い残し親は渋るだけに終わっていた。

カナの家の灯りが遅くまで点いていたあの日。恐らく、カナは親を説得していたのだということは、華吾でも容易に想像できた。しかし、カナの家が遅くまで明るかったのはあの日だけで、それ以来は華吾の目が冴えているうちに灯りは消されていた。

そして、あの日以来、カナの表情はどこか晴れやかだった。

「カナ、最近なんかいいことでもあったのか？」

「さあ。クリスマスが近いからなんじゃないの？」

カナから直接は聞いていないが、華吾は半ば確信していた。カナの晴れやかな表情とは裏腹に、ハルの所へ来る回数は少なくなっていた。男二人だけだと、こうも話が弾まないものだと今更ながら実感する。そのためのゲーム機なのかもしれないが、全くと言っていいほど打ち込めなかった。

「デコピン、してくんねえかな？」

「は？」

手を止めて華吾が顔を上げると、ハルは前髪を上げていた。

「今から罪を犯すからさ、デコピンしてくれないか？」

「それが罪かどうかを決めるのは僕だ。だから、デコピンはその後」

華吾は、ふふ、と笑って見せるが、ハルの真剣な表情に言葉を飲み込んだ。

「じゃあ、先に罪を犯すよ」

自然とゲーム機からもれる音楽が失せていき、室内にハルの声が広がった。

「どうやら、俺はカナを檻から出してあげられそうに無いみたいだ。華吾に大事なことを隠していた　カナが好きだ」

恐る恐る顔を横に向けると、華吾はまだ微笑んでいた。しかし、その顔の横にはしっかりと人差し指と親指でわっかを作っている。

「やっぱり、大事なことを隠してたんだから、おでこね？」

この日も乾いた音が室内に響いた。

「これ、クリスマスプレゼント」

学校が冬休みに入って間もなく、クリスマスが街の色を染めた。ハルが入院したままクリスマスを迎えることもあったけれど、プレ

ゼント交換が華吾とカナの二人だけで行われたことは無かった。

ハルの居る病院から少し離れたところにある、クリスマス色に染められた木の下で、華吾はカナから二つの包みを受け取った。包装紙に包まれていながらも、両方とも中身がやわらかい。

「クリスマスケーキ買ってから行くから、先にハルのところ行って。あ、もう一つのプレゼントはハルのだからね、渡しといて。勝手に開けちゃだめだからね」

ピースを華吾に向けると、カナはそのまま走り去ってしまった。

渡されたプレゼントに視線を落とし、よく見てみると店で包まれたものではないことがわかる。未だに明かりの点かないクリスマスツリーを背に、華吾はプレゼントを抱き、ハルの居る病院へと足を向けた。

何かを作ることなんてできないし、気の利いたものが買えるほどのお金も持っていない。結局、華吾は例年通りデパートの地下で、小包のお菓子を買ってから病院にたどり着いた。

ロビーにある小さなクリスマスツリーの周りには、沢山の子供が居て保護者に注意されつつも甲高い声を院内に響かせている。

そんな微笑ましい光景の横を通り過ぎ、華吾はエレベーターを待った。

静かに光を進めるエレベーターは途中で止まり、しばらくすると再び光を進める。

ようやく降りてきたエレベータには誰も乗っていなかった。

“幼馴染”という言葉を知ったとき、カナは華吾とハルに微笑んだ。同様に華吾も微笑んだが、ハルだけは苦笑していた。

今更だけど、ハルの表情の意味がわかったような気がした。

つまり、ハルは賢かったのだ。華吾よりもカナよりもずっと。

さっきまで、ハルの居る病室にやってくるカナに何かサプライズを仕掛けようと企てていたのに、今の華吾の脳内にその企ては存在しなくなっていた。

何か、糸のようなもので引つ張られるかのように、エレベーターから出てきた華吾は不思議と、無意識のうちに『織田治樹様』と書かれた表札の前に立っていた。

「カナを檻から出してあげてもいいんじゃないか？」

突然声が聞こえたと思い、扉を開けてみた。

華吾の目に映ったのは、空っぽの病室だった。

こういう時って、頭が真っ白になるんだろうな。そう考え出した華吾の脳内は、ハルとカナと三人で談笑する姿が思い出されていた。華吾もカナも楽しそうにしているのに、ハルだけはどこか寂しそうに笑っている。

自分だけが病に侵されていることが悔しいのだろうか。知らずの

うちにカナを縛ってしまっていたことが悲しいのだろうか。三人一
緒にはいられないということに気づいてしまったことが辛いのだろ
うか。

華吾には、そのすべてが含まれているのだと感じられた。

「華吾、もうこっちに来ていたのね」

華吾が振り向くと、そこには息を切らした華吾の母親が居た。暖
かそうなセーターに身を包み、両手を握り締めている。

「ハルちゃん、今手術室に行ったところなのよ。ドナーが現れたそ
うなの」

母親が今にも泣き出しそうな顔をするものだから、華吾は信じた
くない方を信じないではいられなかった。

信じたい方ならば、素直に喜べるのに。

今はただ、辛い。

ハルの移植手術は成功し、副作用もほとんど無く、しばらくして
無事退院できた。しかし、それだけで華吾にとっては十分だった。

ついに、カナを檻から出してあげることができなかった。結局、
一番辛い思いをするのはカナだった。残るにしても、いなくなるに
しても。

いつしかハルが言っていた“3”と“2”の話を思い出し、華吾

は離れた点は自分のことだと感じた。

カナがハルに対しての拒絶反応なしだということを知りながら、華吾は何も言わずにやり過ごしていた。カナが親を説得できたにしろそうでないにしろ、無意識のうちにカナの決意を受け入れていた。

病気と闘うハル。決意を持って歩んだカナ。逃げた自分は、やはり離れていった点だ。

そして、華吾はハルに大事なことを隠していた。

「デコピン、してくれないかな」

ハルとの久しぶりの登校。

いつか、ハルがそうしたように華吾は前髪を上げる。

罪に対しての罰は小さいかもしれない。それでも、その意義は大きい。

急に切り出した華吾にハルは眉根を寄せる。

しかし、華吾の目はいつに無く真剣だった。

「三回分だからね」

【完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1844j/>

キミと僕とハル～3と2のひかく～

2010年10月16日00時02分発行